

バイオミミクリという学問が注目されている。バイオは生物、ミミクリは模倣で、生物の特徴を技術開発に利用する研究である。第一は形態の模倣で、わずかな抵抗で水中に突入するカワセミのクチバシを真似て高速鉄道の先頭車両を設計するなど好例である。第二は機能の模倣で、高速で遊泳するサメの鮫肌を真似た布地の水着で記録が向上した事例がある。

第三は生物社会の構造を模倣する研究である。動物の排出する炭酸ガスは水分と日光とともに植物が酸素に変換し、炭素は自身の枝葉に利用する。その枝葉は動物の食物となり、動物が排出する糞尿は植物の栄養となる。すべてが循環して廃棄物質が発生しない。流行の言葉で表現すれば生物社会は持続可能なのである。

この生物社会は哺乳動物の発生から計算しても億年単位で持続しているが、人間社会は化石燃料を消費するようになった工業社会から大量の廃棄物質を産出し、百年単位で環境破壊という限界に直面している。この持続してきた生物社会の構造を人間社会に導入しようというのがバイオミミクリに期待される最大の役割である。

完全な循環には程遠いが、人間社会にも循環構造が次第に登場している。世界の食糧生産は一三億トンであるが、三〇％は廃棄され、しかも半分は賞味期限以前の食品である。これを有効利用しようと先進諸国ではフードバンクが設立されている。それを可能にしているのが供給と需要を相互に参照できる情報システムである。

日本の家庭の押入れや物置に退蔵されている不要製品を金額に換算すると三七兆円という調査結果がある。世帯あたりでは七〇万円にもなる。これを流通させるようにしたのがフリマアプリであり、その代表であるメルカリは創業から五年で一兆円を社会に循環させてきた。これも情報システムによって可能になった仕組みである。

世界では「トリリオン・センサーズ・ユニバース計画」が構想され、毎年、一兆個のセンサーをモノに添付し、社会の万物の動静を把握しようという計画が進行している。これにより廃棄物質を流通させることができれば、生物社会の循環構造とは相違するが、人間社会が独自に開発した循環構造が実現する。

人間が発明した高度な情報システムは廃棄物質を減少させる切札のようであるが、厄介な問題の原因でもある。広告が証明しているが、情報は人間の欲望を喚起して不要な商品を増大させる効果を発揮する。しかも、かつては大衆に宣伝していたが、現在では一人一人の嗜好を把握して欲望を喚起するから効果は絶大である。

銀行頭取の経験もある宗教学者井上信一は財産を欲望で割算した数値を幸福の程度と定義し、財産を増加させて幸福を増大させようとするのが西欧思想、欲望を縮小させて幸福の増大を目指すのが東洋思想と説明している。西欧か東洋かはともかく、情報システムは欲望を増大させて幸福を減少させる矛盾を内包する技術である。

この構造に気付いた人間は『旧約聖書』に登場するアダムとイブの楽園からの追放の挿話を代表として、知識の獲得に内在する問題を警告してきた。持続可能は世界全体の目標になっているが、最大の障壁は人間社会のみに存在する欲望の増大という構造であり、残念ながら、それを加速度的に拡張しているのが現代社会を支配しつつある情報技術である。